

研究ノート

高機能自閉症スペクトラム障害を持つ若者の発達課題

竹内 謙彰ⁱ

本報告は、高機能自閉症スペクトラム障害（HF-ASD）を持つ若者ならびにその母親を対象とした二つのインタビュー研究（竹内, 2012; 2013）で明らかになったことを統合し、ニーズの態様を発達の観点から明らかにすることを目的としたものである。当事者を対象とした研究の結果とその母親を対象とした研究結果の対比的な分析からは、共通点として理解されることの要求が抽出され、相違点として母親にのみ早期発見・早期対応の要求ならびに当事者が自立した生活を送るためのシステムへの希求が顕著に見出された。当事者の語りに基づく分析からは、自立への希求が必ずしも明確なニーズとしては抽出されなかったが、その代わりに、生活にかかわる困難とニーズとして、対人関係・コミュニケーションの困難とニーズ、自己理解のニーズ、二次障害の問題、将来の不安が見出された。これらの生活にかかわる困難とニーズは、HF-ASD の特性に由来する面があると同時に、多くの青年がかかえる発達上の課題という面もあることが示唆された。特に、自己客観視の課題は特性に由来した困難を持つとともに、多くの青年がかかえる課題でもあると考察された。

キーワード：当事者、高機能自閉症スペクトラム障害、インタビュー、特別なニーズ、質的分析

目次

はじめに

1. インタビュー研究の背景
2. インタビュー研究の概要
3. 分析で得られたニーズの特徴
4. 発達の観点からの検討

はじめに

青年期の後期を迎えた高機能自閉症スペクトラム障害（High Functioning Autism Spectrum Disorder；以下、HF-ASD と略称）を持つ若者たちは、定型発達の若者たちと同様、自立の課題に直面する。今日、多くの若者たちが社会に出ようとするときに、様々にたじろぎ先に進めなくなってしまう状況が存在す

る（e.g., 白井, 2014）。そうした社会状況に加えて、HF-ASD の若者たちは、特性上、他者と適切な交流を行うことが苦手であるため、二重の困難をかかえることになる。筆者は、発達障害児の保護者を対象として質問紙を用いた特別なニーズに関する調査研究にかかわった経験（竹内・荒木・荒木・前田・井上・荒井・黄・張・Nguyen, 2011）をふまえて、困難を抱えた個々の人々のかかえるニーズに迫るために HF-ASD を持つ青年・成人とその母親を対象者としてインタビュー調査を行った（竹内, 2012; 2013）が、その中で、自立にかかわる困難や課題が浮かび上がってきた。ただし、当事者を対象としたものとその母親を対象としたものをそれぞれ独立した論文としてまとめたため、両者を統合した観点での考察は十分には行えていない。それゆえ本報告では、それら二つのインタビュー研究で明らかになったことを統合し、ニーズの態様を発達の観点から考察する

i 立命館大学産業社会学部教授

ことを目的として設定する。発達の筋道は多様であるが、他方で、ある発達の時期に多くの人に共通して生じる事柄もあり、発達段階的な捉え方も有効性を持っている場合があると考えられる。HF-ASDを持つ若者たちが、社会に巣立つ際の課題が発達的観点から整理されることで、支援のあり方もより明確になることが期待される。

1. インタビュー研究の背景

HF-ASD 当事者ならびにその母親を対象とした二つのインタビュー研究は以下のような目的の下に実施された(竹内, 2012; 2013)。すなわち、HF-ASD者に対する、より適切な発達支援を作り上げていくための基礎資料として、当事者とその家族に対して詳細なインタビューを行い、得られた語りのデータを、発達の観点から分析し、ニーズの諸相を詳細に明らかにしてゆくことであった。

近年、我が国でも、発達障害の当事者が自身の困難を整理して公表した出版物がいくつか見られるようになってきた(e.g., 綾屋・熊谷, 2008; 藤家, 2005; 小道; 2009; 森口, 2004)。発達障害者への合理的配慮を行うためには、当事者が自らのニーズを整理する試みが重要であると考えられる。筆者が行ったインタビュー研究は、当事者ニーズの語りを引き出す一つの試みであった。

比較的少数の発達障害者に対し、生育史上の様々なニーズを語ってもらうことを企図したインタビューを行うとともに、母親へのインタビューも並行して行い、発達の時期ごとの多様なニーズを掘り起こしつつ整理することとした。生育史を語ってもらうために、青年期後期以降の人たちを対象とした。インタビューに応じられることが条件となるので、対象者は知的障害を伴わない、いわゆる高機能発達障害者に限定した。なお、研究の当初においては、HF-ASDに加えて学習障害や注意欠陥多動性障害の人たちをもインタビューの対象として想定していたが、具体的に研究協力者を募る段階において再度の

検討を行い、特に対人関係のトラブル等の諸困難から教育現場や日常生活、さらには就職・就労において問題や困難が生じやすい自閉症スペクトラムに焦点を当てて研究を進めることとした。

知的障害がないか、あっても比較的軽度とされる人々は、問題が目立ちにくく気づかれにくいいため、適切な配慮がなされにくく、様々な場面で生活上の困難に直面しやすい。定型発達児であっても自分自身との向き合い方にある共通した困難を生じやすい児童期後期から思春期にかけての時期は、とりわけHF-ASDを持つ子どもたちにとっては危機的な時期であると考えられる(竹内, 2009; 2010)。HF-ASD者の自伝や手記などでは、この時期に、いじめのエピソードがあることが多い。また、学力上の問題などから自己効力感を極端に低下させてしまい、不登校になる事例も見られる。インタビューでは、特に児童期後期から思春期にかけてのエピソードに焦点を当てるわけではないが、結果的に分析の焦点のひとつとしてその時期が浮かび上がることが予想された¹⁾。

インタビュー研究のめざすところは、何よりも発達障害の当事者にインタビューすることで、支援のニーズを明らかにしていくことであった。さらに、家族へのインタビューと重ね合わせることで、発達障害者が出会う困難の実相が立体的に浮かび上がることが期待される。近年、発達障害の当事者が自らの困難を語った本(e.g., 綾屋・熊谷, 2008; 藤家, 2005; 小道; 2009; 森口, 2004)がいくつか出版され、困難の実相が知られるようになってきた。そうした資料は発達支援を考える上で非常に役に立つものである。しかし、具体的な支援につなげる上では、困難と支援とをつなぐ観点から問いをたてることが重要であり、インタビュー調査を行う意義もそこにあったといえよう。

2. インタビュー研究の概要

青年～成人期のHF-ASDのある子どもを持つ母親

を対象としたインタビュー研究（竹内, 2012）では、12名（50歳代前半～70歳代前半）の調査協力者を得た。青年～成人期の HF-ASD 当事者を対象としたインタビュー研究（竹内, 2013）では、上記研究の対象者の子どもたちの中で研究協力の承諾が得られた7名（女性3名、男性4名；10歳代後半～30歳代後半）の調査協力を得た。筆者がインタビュアーとなってインタビューを行い、得られた語りを逐語録化したものを対象として、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA と略称）により、それぞれ分析を行った。抽出された概念・カテゴリーに基づく関連図を、図1及び図2に示す。それぞれの対象者の結果にかかわる個別の検討はすでに公刊されているのでそちらに譲り、ここでは両者の共通点と相違点について整理を行っておきたい。

語る主体が当事者本人であるのかその母親であるかにかかわらず、図1と図2に示した概念やカテゴリーには共通するものが多いのは、当事者ニーズにかかわる語りであるのである意味では当然であろう。しかし、母親と HF-ASD 当事者とでは、同じ現象に対しても受け止め方や感じ方・考え方が異なるはずであり、子細に二つの図を見比べれば、相違点も多く見出すことができるだろう。

まず、共通点としてあげられるのは、理解を求める要望が、重要なニーズとして浮かび上がった点である。当事者においては「理解してほしいという要望」が中心的なカテゴリーとして位置づけられており、母親インタビューにおいても、「多様性を含めた ASD の特性理解の要望」という概念が単独で同名のカテゴリーを構成しており、他のすべてのカテゴリーに影響を及ぼすプロセスが想定されていた。適切な配慮や支援を得るためには、何よりも周囲や社会の理解が重要であるとの認識は、HF-ASD 当事者の母親と特性に自覚を持つ当事者自身の両者に共有されるものであろうと考えられる。

また、学校にかかわるニーズ、生活にかかわるニーズ、就労にかかわるニーズの3点は、大まかには共通したものが見出されたと言ってよい。

他方、主たる違いとしては、①母親にのみ、「早期発見・早期対応の要求」というカテゴリー、ならびに②「当事者が自立した生活を送るためのシステム」というサブカテゴリーが見出されていることである。

①「早期発見・早期対応の要求」は、母親にとっては重要な位置づけを持つが、当事者にとっては想起できる記憶ではないため語られることがなかったのだと考えられる。②「当事者が自立した生活を送るためのシステム」については、母親にとって自分たち親が子どもへの配慮や支援を行うことができなくなる将来のことが切実な問題として把握されるために自立の課題が語られるのに対して、当事者にとっての当面する切実な問題は、日々の生活の困難や就労の課題との格闘であるためではないだろうか。こうした親子の認識の違いは、定型発達者とその母親の関係においても生じうるが、それがより明瞭に現れたと考えるべきであるかもしれない。

今後の課題として、多様性に応じたニーズ把握のあり方の検討をあげておきたい。同じく高機能自閉症スペクトラム障害の範疇に入る人であっても、その行動特徴は、共通性はあるつつも非常に多様性の幅があることが、今回のインタビュー調査を通じて明らかになった。母親のインタビューにおいても、単に理解を求めるというのではなく、多様性を含めて理解をしてほしいという要望が出されていたことが印象的であった。当事者へのインタビューでは、さらに多様性に関する実感が得られた。インタビューへの答え方、話し方からして、一人一人個性的であった。しかし、そうした印象だけではなく、インタビューの分析から、それぞれの人がかかえるニーズもまた、多様であることが明らかになったのである。

3. 分析で得られたニーズの特徴

障害理解のニーズ

当事者とその母親のニーズの重要な共通点のひとつ

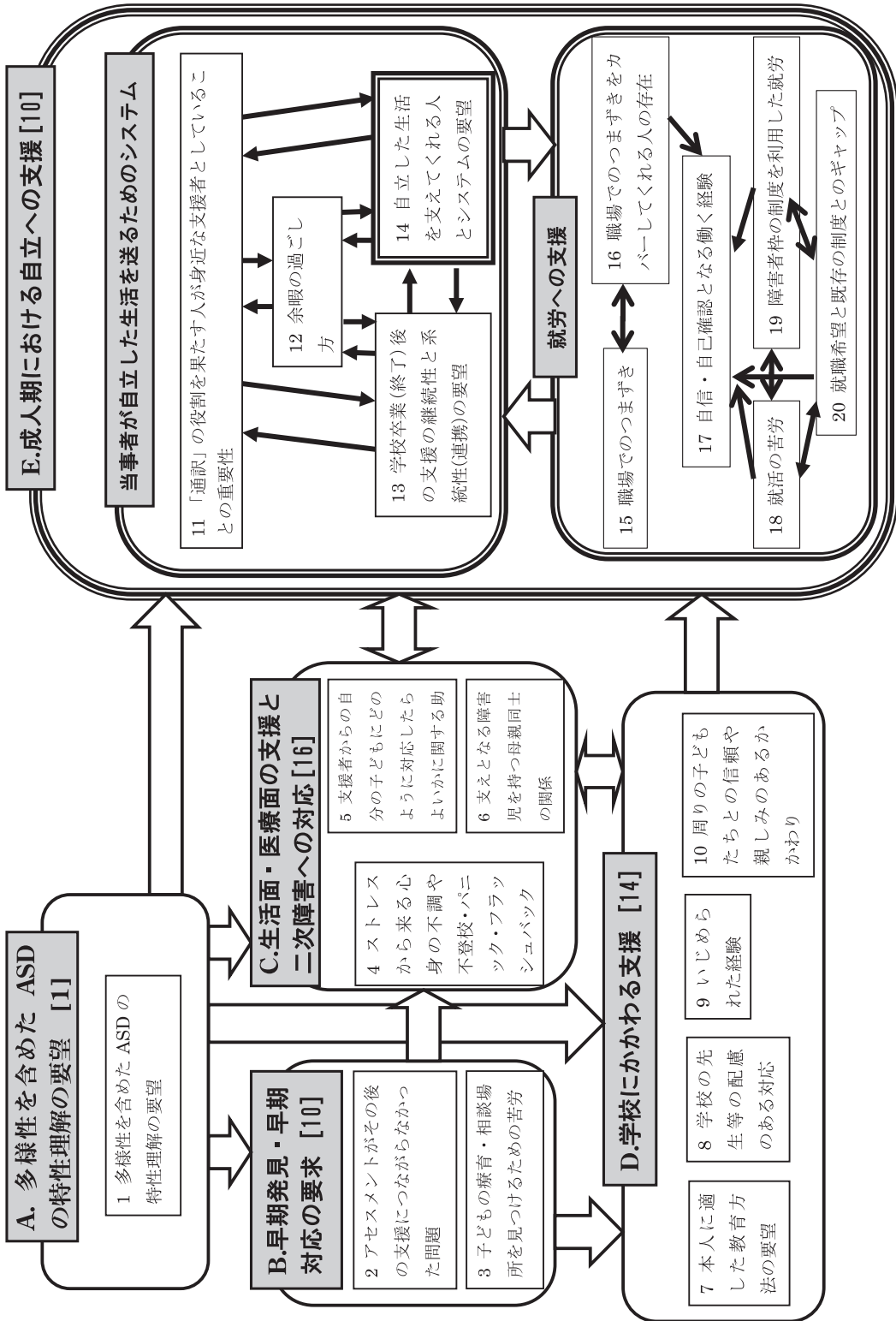


図 1 カテゴリー間の関連 (母親を対象とした分析) (竹内, 2013)

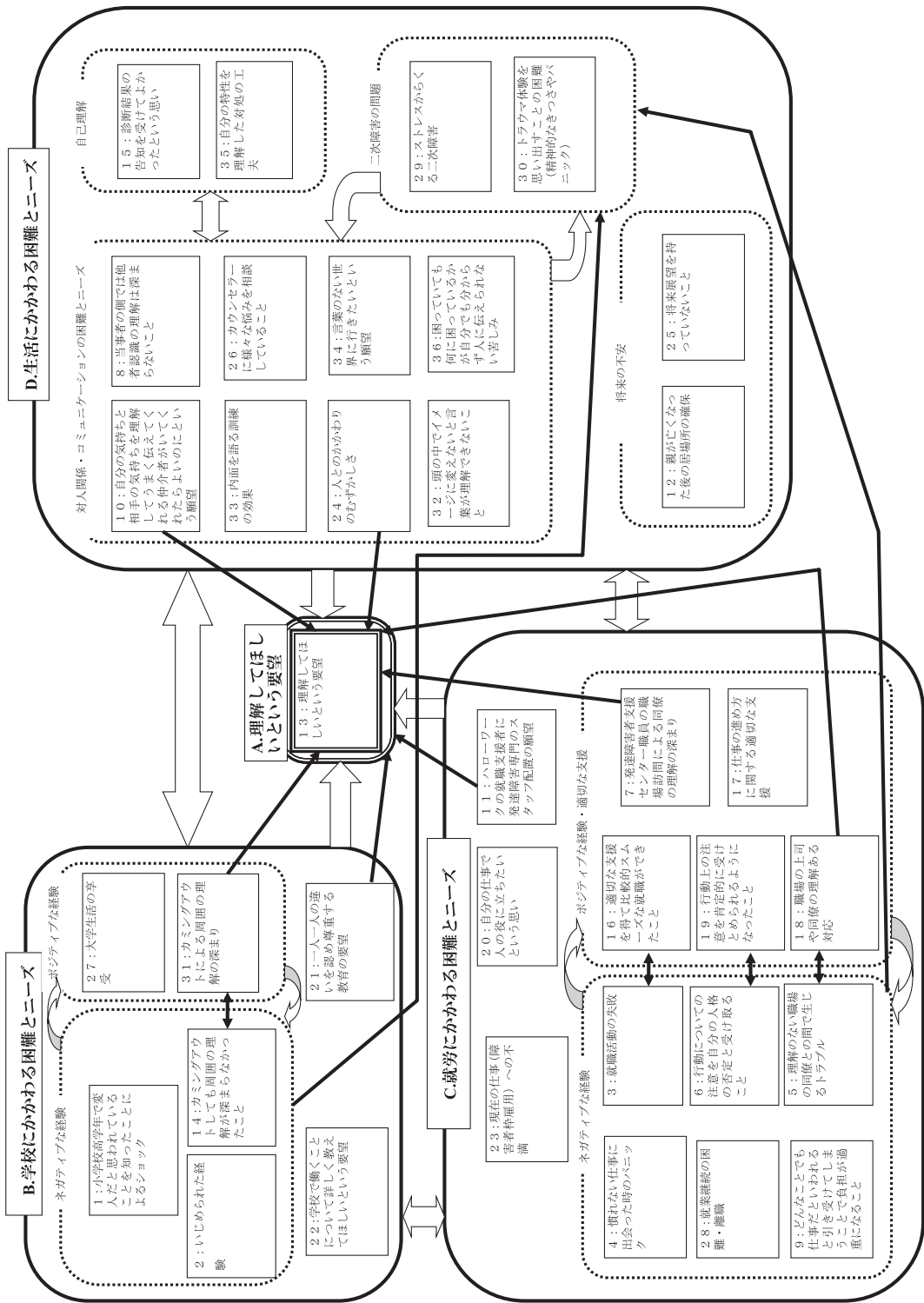


図2 カテゴリー間の関連 (当事者を対象とした分析) (竹内, 2014)

つとして、障害理解を求める要望が見出された。当事者においては「理解してほしいという要望」が、母親においても「多様性を含めた ASD の特性理解の要望」がそれぞれ、その他のカテゴリーとつながりを持つ重要なカテゴリーを構成していたのである。このことは、支援を構想していく上で、一つの重要な示唆をもたらすように思われる。すなわち、理解をしてほしいという思いは、単に、支援を直接的に担う専門家に対してのみならず、当事者にかかわる多くの人に対して向けられるものだからである。

障害理解のニーズに応えるためには、一つは広く一般社会に対して啓発的な活動を行うこと、もう一つは、身近な人間関係に関わっての調整という両面から、構想しなくてはならないだろう。後者に関しては、さらに就労場面と日常生活に分けて考えることができる。就労場面では、例えば、自閉症スペクトラム障害者を受け入れる職場の人たちに対して、当事者自身が自らの障害特性と配慮してほしいこと regarding について説明できることに越したことはないが、実際にはそれは難しいことが多い。職場での合理的配慮を要請する「代弁者」の役割を果たす人がいれば、就労を始めるに際しても、就労継続においても、生じうる問題を減らすことができると考えられる。こうした役割は、現在、発達障害者支援センター等の支援機関・団体の職員が担うほか、場合によっては保護者が担う場合があるが、制度的にこうした支援が受けられやすくなることが望ましい。日常生活で出会う人々に理解を得るための支援を具体的に構想することは難しいが、何か問題や困難が生じたときに人から支援を受けられる工夫を考えることはできるだろう (例えば, Hane et al., 2004 を参照)。

また、理解してくれる人とつながるということも大切であろう。相談できる機関は、今日整備されつつあるが、それとは別に、当事者同士の集まりや親同士の集まりなども、理解してくれる人を求めるニーズを満たすうえで重要だと思われる。とりわけ、乳幼児期に指摘や診断がなされず特別な支援を受けずに過ごしてきた人たちの場合、そうした横のつな

がりを持っていないことが多いため、ニーズはより切実といってよいだろう。障害者団体や親の会の集まりなどは、相互に理解し合える仲間同士の関係を形成する上で、重要な機会をもたらすものだろう。また、公的な支援機関においても、家族間のつながりを作ったり、あるいは当事者同士のサークルを形成したり維持したりする支援がなされている場合がある。

なお、「障害理解のニーズ」が形成されるためには、その大前提として、当事者やその家族が障害についての理解をある程度深めている必要がある。そのためには、障害のアセスメントが重要であり、それをどのように告知するかが課題となってくるだろう。

就労のニーズと自立のニーズ

母親のニーズ分析と当事者のニーズ分析において、就労のニーズは共通しているが、自立のニーズの切実さは母親においてより顕著である結果が得られた。当面の就職あるいは就労の継続という課題が前面にある当事者に対して、母親は将来展望を踏まえたニーズを持っていると言えるだろう。定型発達者とその母親でも同様の傾向が見られるかどうかは興味のある問題ではあるが、ある程度似た傾向が見出されるのではないかと予想される。

就労支援においては、当事者の特性やスキルについてのアセスメントと、必要に応じた訓練や学習、そして、当事者の特性やスキルにあった仕事を見出すジョブマッチングなどが重要である。また、すぐに実際の仕事の場に移行することが困難な場合、経験やスキルを形成する機会を提供する支援も求められているところである。具体的には、就労移行支援事業所や就労継続支援 B 型などがそれに当たるだろう。様々な障害に対応した事業所があり、発達障害に対応したものも増えつつあるが、さらに必要に応じた広がりが見られる。さらに、就労を継続できるようにしていくことも課題である。これには、支援機関の関わりが必要な場合もあるが、職場での理解

とサポートも重要な要素だと考えられる。障害者の法定雇用率が、2013年4月1日から引き上げられた（民間企業で1.8%から2.0%になる）ことにともなって、発達障害者の雇用に取り組み始める企業もわずかずつではあるが増えてきている。また、発達障害者のために就職を支援する企業も現れてきている。現実存在する多くのニーズにはまだまだ対応できている状況ではないが、このような積極的な動向には期待したい。

自立にかかわるニーズについては、母親のニーズ分析で抽出された「自立した生活を支えてくれる人とシステムの要望」が、やはり重要であろう。就労支援以外で具体的にどのような支援が求められるかを整理すると、住む場所の確保、職場や家族以外の人間関係の形成、余暇活動へのサポートなどをあげることができるだろう。さらに、当事者自身が取り組むべきものとしては、ライフスキルの向上をあげておこなうてはならない。ただし、障害特性から獲得が困難なものについては、それをどう補うか（個人・団体の支援を受ける、補助的な道具や機械を利用する、など）の工夫も必要になってくるだろう。

4. 発達の観点からの検討

青年期後期から成人期にかけてのニーズに関して発達の観点からの検討を行う上で、まず注目されるのは、自立の課題であろう。青年を対象とした多くの研究が、自立を重要なテーマとして扱っている。しかし、この点について、対象者間での違いが認められる。母親を対象とした分析においては、《自立した生活を支えてくれる人とシステムの要望》がコア概念として抽出された。子どもに何らかの障害がある場合、多かれ少なかれ親が子どものケアに通常以上にかかわらざるをえなくなり、それが常態化しがちになる。それだけに、子どもが自立した生活を送れるようになることは、子どもにとってだけでなく、親自身の切実なニーズでもあると考えられる。

では、「当事者が自立した生活を送るためのシス

テム」のニーズについて、ある程度まとまった概念やサブカテゴリーが形成される語りが母親には見られたのに対して、当事者には必ずしも明瞭にそうした概念やカテゴリーが抽出されなかったのはなぜであろうか。母親にとっては、自分たち親が子どもへの配慮や支援を行うことができなくなる将来のことが切実な問題として把握されるために、こうした自立の課題が語られるのに対して、当事者にとっての当面する切実な問題は、日々の生活の困難や就労の課題との格闘であるのだろう。将来の不安については語られることがあっても、それが自立の課題として認識されるまでには十分まとまっていないのかもしれない。今回見出されたような母親と子どもにおける自立にかかわる認識の違いは、実際には定型発達者とその母親の関係においてもみられる可能性がある。今後検討すべき課題の一つと言えるかもしれない。

では、HF-ASD 当事者の若者たちは、実際のところ、どのような発達課題を持っていると言えるのだろうか。その点について、当事者の語りの分析に立ち戻って考えてみることにしたい。当事者を対象とする分析をまとめた図2を見てみれば、4つのカテゴリーのうち、多くの概念を含んでいるのは、「C. 就労にかかわる困難とニーズ」と「D. 生活にかかわる困難とニーズ」の二つであることがわかる。多くの概念が含まれているということは、それだけ多くの語りがそこに含まれていることを意味している。これら二つのカテゴリーは、どちらも当面する課題にかかわる困難やニーズであり、語りが多いのも当然であるかもしれない。これらのカテゴリーに含まれる概念を眺めれば、その多くに、対人関係の課題が共通して含まれていると考えられる。「D. 生活にかかわる困難とニーズ」カテゴリー内の小カテゴリーである「対人関係・コミュニケーションの困難とニーズ」はまさに対人関係の課題であり、また「自己理解」小カテゴリーも広義の対人関係課題に含まれるであろう。「C. 就労にかかわる困難とニーズ」カテゴリー内のポジティブな経験とネガティブな経

験に対比的に配置されている概念のうち、「5：理解のない職場の同僚との間で生じるトラブル」と「6：行動についての注意を自分の人格の否定と受け取ること」(ネガティブな経験)、また「18：職場の上司や同僚の理解ある対応」と「19：行動上の注意を肯定的に受けとめられるようになったこと」(ポジティブな経験)は対人関係にかかわっている。また、「20：自分の仕事で人の役に立ちたいという思い」という概念も、対人関係における能動性・積極性を示すものと捉えることができるだろう。

以上の整理から見えてくるのは、ASDの特性からすれば当然と考えられる、対人関係の課題の重要性である。ただし、そうした課題は、対象となったHF-ASDの人たちの発達的特徴とも関連した現れをしていると捉えるべきであろう。「対人関係・コミュニケーションの困難とニーズ」小カテゴリー内の、「8：当事者の側では他者認識の理解は深まらないこと」や「10：自分の気持ちと相手の気持ちを理解してうまく伝えてくれる仲介者がいてくれたらよいの」という願望などは、対人関係上の困難、特に他者理解やコミュニケーションの困難の表明であるが、他方で、こうした困難が存在していることへの気づきを表してもいる。また、「26：カウンセラーに様々な悩みを相談していること」や「33：内面を語る訓練の効果」のように、他者との言葉を介した交流の意義について触れているものもある。

HF-ASDの当事者であり有能な研究者でもあるテンプル・グランディン(Grandin, 2008/2010)は、その著書の中で、対人関係を成功させる4つの秘訣として、①相手の立場で考える、②柔軟な思考、③好ましい自尊心、④やる気、の4つの要素をあげているが、その中で最も重要なものとして、相手の立場で考えることをあげている。もちろん、ASDの特性を持つ人々にとって、相手の立場で考えることは困難を伴うことではあるが、社会生活を送るうえで欠かすことができないと彼女は指摘しているのである。では、ASDの特性を持つ人々にとって、相手の立場で考えることはどのように獲得されるのだら

うか。グランディン自身は、論理的思考力によってそれを獲得してきたと語っている。ASD児における他者の認識内容の推測の発達は、定型発達児と比較して遅れるものの、言語的な知的能力がおよそ9、10歳の水準に達すると、いわゆる「心の理論」が獲得されることが指摘されている(別府, 2007; 別府・野村, 2005; Happé, 1995)。直感的に他者の心の状態を捉えることは困難であっても、論理的な思考を駆使して他者の立場で考えることは可能になってきたことを、当事者のグランディン自身が指摘しているのである。ただし、HF-ASD者が相手の立場で考えられるようになる道筋は、一様ではないようである。グランディンが紹介しているジャーナリストのショーン・バロンは、やはりHF-ASDの当事者であるが、彼の場合はトークセラピーが、他の人の視点を理解するのに役立つと述べている。実際に、そうした経験を経て他者の立場で考えられるようになったことで、バロンは現在の仕事を継続できていると述べている。いずれにせよ長い時間をかけた経験の蓄積が必要であることはいままでもない。こうした力をつけるうえで、動機づけは非常に重要であろう。何事かを成し遂げたいという動機があることから、他者とうまくやっていくためにこうした力をつける必要性を理解する事もあるだろうし、さらには人そのものへの関心を持つことも重要だと考えられる。そのためには、他者との関係性の中で、ネガティブな経験の蓄積はできるだけ避ける配慮も必要であろう。ただ、HF-ASD児・者がこうした力をつける10代の時期には、実はいじめの標的になりやすいという問題がある。いじめ被害の問題は、ASDの特性の有無にかかわらず深刻な問題であり、適切な対処が求められるものでもある。他者との適切な関係性を発達させることを困難にするという点では、ASD特性の人にとってより深刻であるものの、一般的に見ても発達上の困難をもたらす事態であると言わなければならない。

他者の立場で考える経験は、自己理解を深める契機ともなる。10代は、その意味でも重要な年代であ

る。この点を検討するうえで、可逆操作の高次化における階層-段階理論の提唱者である田中昌人の指摘（田中，1980；1987；京都教職員組合養護教員部，2002）は、重要な示唆を含んでいるように思われる。田中は、通常10歳頃に大きな発達の質的転換が生じると主張している。この時期には、例えば認識発達における飛躍が生じることは、教育現場においても経験上指摘されてきたことであり、また実証的な研究も見られており、一定の根拠がある。しかし、田中は単に認識発達という領域で事柄を捉えるのではなく、人格発達上の大きな変化が生じることを指摘している。人格発達上の変化にかかわる重要な要素として指摘されているのが、自己客観視である。それ以前の年齢でも、子どもは自己意識を持っているが、10歳の頃に獲得されるものは、自己の体験を踏まえて不十分ではあっても社会的な関係性の中で自己を捉えようとする働きである。その際、自己への信頼性を培って自己を評価できるようになることの重要性が強調されている。そして田中は、通常14歳頃になると、生後第4の新しい発達の力が誕生すると指摘し、この発達の力が、20代以降の新たな発達の階層に向かう力として作用すると捉えている。自己客観視との関連では、交友関係の発展に基づき、仲間関係の中で自己開示をするようになること、さらに第三者の手がかりから自己評価を行うようになっていくと指摘している。こうしたプロセスは、HF-ASD 者の場合、その特性から困難を伴うことが予想されるが、翻って定型発達の子どもたちにとっても、自己客観視の発達に豊かな土壌があるとは言えない現状がある。自己への信頼性は他者との信頼関係があってこそ成り立つものであるが、先ほど触れたいじめなどは、そうした信頼関係を崩すものである。そもそも、子ども同士の信頼関係の形成が教育の文脈の中での競争関係の浸透によって困難になっていることの問題を田中は指摘している。HF-ASD 者のかかえる対人関係の困難については、そのある部分は特性に由来することを否定できないが、それとともに、今日の多くの若者が直面する発達上

の困難とも根底ではつながっていると捉えるべきものであるだろう。だとすれば、HF-ASD 者への支援は、特性に配慮したものであるとともに、日常生活のなかで他者との信頼関係を作り出していくものでもなければならない。

注

- 1) しかし、後述（2.および4.）したように、この時期のエピソードの語りは必ずしも多くはなく、むしろ、当面する仕事や生活などの問題についての語りの比重が大きかった。

引用文献

- 綾屋紗月・熊谷晋一郎. (2008). 発達障害当事者研究—ゆっくりとていねいにつながりたい. 東京：医学書院.
- 荒木美知子・荒井庸子・前田明日香・井上洋平・荒木穂積・竹内謙彰. (2011). 東アジアにおける自閉症スペクトラム児の親のニーズに関するインタビュー調査—日本の場合—. 荒木穂積（編）. 東アジアの発達障害児のための治療教育プログラム開発に関する国際共同研究（平成20年度～22年度「アジア・アフリカ学術基盤形成事業（日本学術振興会）」最終研究報告書）. 立命館大学人間科学研究所. Pp.104-122.
- 別府哲. (2007). 自閉症における他者理解の機能連関と形成プロセスの特異性. 障害者問題研究, 34, 259-266.
- 別府哲・野村香代. (2005). 高機能自閉症児は健常児とは異なる「心の理論」をもつのか：「誤った信念」課題とその言語的理由付けにおける健常児との比較. 発達心理学研究, 16(3), 257-264.
- 藤家寛子. (2005). あの扉のむこうへ：「自閉の少女と家族、成長の物語」. 東京：花風社.
- Grandin, T. (2008). 中尾ゆかり（訳）. (2010). 自閉症感覚：かくれた能力を引き出す方法. 東京：日本放送出版協会.
- Hane, R. E. J., Sibley, K., Stephen M. Shore, S. M., Roger Meyer, R., & Phil Schwarz, P. (2004). Ask and tell: Self-advocacy and disclosure for people on the autism spectrum. Autism Asperger Pub

- Co. (荒木穂積 (監訳)・森由美子 (訳) (2007). 『自閉症スペクトラム生き方ガイド: 自己権利擁護と障害表明のすすめ』クリエイツかもがわ)
- Happé, F. (1995). The role of age and verbal ability in the theory of mind task performance of subjects with autism. *Child Development*, 66, 843-855.
- 小道モコ. (2009). あたし研究: 自閉症スペクトラム～小道モコの場合. 京都: クリエイツかもがわ.
- 京都教職員組合養護教員部 (編著). (2002). 子どもの発達と健康教育④. 京都: クリエイツかもがわ.
- 森口奈緒美. (2004). 変光星—自閉の少女に見えていた世界. 東京: 花風社.
- 竹内謙彰. (2009). 学童期における認知発達の特徴～9, 10歳の発達の節目に焦点を当てて～. *立命館人間科学研究*, 18, 77-86.
- 竹内謙彰. (2010). 高機能広汎性発達障害児のニーズ理解と9, 10歳の発達の節. *心理科学*, 30(2), 11-22.
- 竹内謙彰. (2012). 高機能自閉症スペクトラム障害者の特別なニーズ—青年期後期～成人期の子どもを持つ母親に対するインタビューに基づく分析—. *心理科学*, 33(2), 46-63.
- 竹内謙彰. (2013). 高機能自閉症スペクトラム障害者の特別なニーズ—青年期後期～成人期の当事者に対するインタビューに基づく分析—. *立命館大学産業社会論集*, 48(4), 41-58.
- 竹内謙彰・荒木穂積・荒木美知子・前田明日香・井上洋平・荒井庸子・黄辛隠・張鋭・Nguyen Thi Hoang Yen. (2011). 自閉症スペクトラム児とその家族のニーズについての日本・中国・ベトナム3カ国の比較調査研究. *立命館大学産業社会論集*, 47(1), 213-236.
- 田中昌人. (1980). 人間発達の科学. 東京: 青木書店.
- 田中昌人. (1987). 人間発達の理論. 東京: 青木書店.

Research Note

Developmental Task in Adolescents and Young Adults with High Functioning Autism Spectrum Disorder

TAKEUCHI Yoshiakiⁱ

Abstract : The aim of this study was to clarify the aspects of special needs of adolescents and young adults with high-functioning autism spectrum disorder (HF-ASD) by integrating the outcomes of two researches in which the participants were young people with HF-ASD and their mothers. Contrasting the results of the two studies, to wish that people better understand the traits of autism spectrum disorder (ASD) was a common factor, while needs of early detection and treatment and needs of helping people with HF-ASD to be independent were found only in the mothers. Although needs to be independent were not clearly extracted from the young people's protocol, needs and difficulties in daily life were found instead. It was suggested that the needs and difficulties were derived not only from the traits of HF-ASD but from general problems that most young people confront. The importance of taking an objective view of self was discussed in relation to developmental tasks.

Keywords : high-functioning autism spectrum disorder, interview, special needs, qualitative analysis

ⁱ Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University